

湘南慶育病院が開院し、1年が経ちました。

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



湘南慶育病院は2017年11月6日に開院し、今月で開院から1年が経過しました。

今回の理事長トークでは、湘南慶育病院 院長 鈴木 則宏先生に現在の病院の状況について話を聞きました。

■ 湘南慶育病院が開院して1年、鈴木先生が院長に就任されてから7ヶ月が経ちました。

振り返ってみていかがですか？

やっとスタートラインに立ったという気持ちでいます。というのも当院は開院時に130床でスタートし、私が着任後の本年5月に50床を増床、さらに9月に50床を増床し、やっと230床フルオープンとなったからです。

健育会グループからも非常に強いバックアップをいただきまして、ドクターも4月時点で大幅に増員し、現在では常勤医15名体制となり、幅広い診療科となりました。10月に入ってから、おかげさまでベッド稼働率90%以上をほぼ維持しています。

もともと本病院の一番の大きな目標は「患者さんの社会復帰に向けての回復」です。しかし入院しておられる患者さんのご高齢の方が多く原疾患に加えて合併症が社会復帰に際して支障となる場合が多くあります。当院では内科的、整形的な合併症に関してもしっかりと診療できる体制を整えられたことが、今入院患者さんが増えてきている理由なのではないかと考えています。



この湘南慶育病院のある藤沢市では、医師会に入れていただくのがなかなか大変だと聞いています。

医師会に入会できれば、地域の病院や診療所と密に連携し、さらに地域に貢献して行くことができるようになりますから、なんとか入会させていただければと考えています。

当院地域の藤沢市医師会はとてもレベルが高く、診療内容や病診連携をどうとっているかというのを厳しい目でジャッジし、その上で入会を許可するという方針を取られています。ですから、その基準に見合うよう現在は一生懸命に努力しているところです。先ほど申し上げた通り当院はまだ発展途上の状況ですので、100%うまくいっているかという、そうではない部分もあると思いますが、我々としては精一杯の努力をして参りたいと考えています。幸いにも本年度中に入会するためのヒアリングを受けさせていただくことになりました。とにかく地域の医療に溶け込んでいきたいという私たちの考えをお伝えしたいと思います。



鈴木先生は、これまで慢性期医療にはあまり馴染みがなかったということでしたが、湘南慶育病院でどっぷりと慢性期医療に浸かれていかがですか？

私はこれまで、大学の教職、あるいは急性期医療に携わってきましたので、患者さんが受診されたときにいかにして正確な診断をつけて、正確な治療を施し、いい状態にして次の病院に引き継いでいただくことを優先的に考えてきました。こちらに赴任してからは、患者さんを送ってもらう立場になり、コペルニクスの転回と言いますか、これまでとは違った発想を持たなければならないと感じました。特に回復期リハビリテーション病棟での社会復帰に向けた治療の他、当院には療養病棟もありますから、社会復帰が難しい方へのケアがどうあるべきかということをただ今勉強中です。この領域で先を走っていらっしゃるグループ病院の竹川病院で勉強させていただく機会をいただいたり、講演を聞きに行ったりして患者さんお一人お一人求めていることに多様性があるということを改めて痛感しました。グループの研修会でもそのようなテーマをよく取り上げていただいていますので、私にとって良い刺激になっています。



現在、湘南慶育病院は急性期病院で活躍してきたドクターが多くいます。私自身がそうであるように、急性期とは違った目線で患者さんを診なくてはいけないという、急性期と慢性期のギャップを初めは感じたのではないかと思います。そのギャップを一緒に埋めながら、理想的な回復期・慢性期の病棟を運営するために努力したいと思っています。

また終末期医療に関しては、これまでさっとしか経験されてこなかった先生が多かったと思うのですが、実際にここでは担当の患者さんの終末期に直面する場面も多くなってきており、各々の医師にとって「患者さんの終末期に、どのような姿勢で臨むべきか」ということを深く考える機会になってきています。将来的には、医学生に向けた終末期医療の研修も当院でできるのではないかと考えています。



湘南慶育病院は、日本では初めての大学と密に連携している民間病院です。大学病院では勉強することが難しい慢性期医療を学ぶ研修の場として医学生や若いドクターに活用してもらい、その学びをこれからの医療に生かしてもらいたいというのが、私の夢でもあります。



医学教育の場でも、いわゆる僻地医療などを学ぶカリキュラムは組まれています。開業医のクリニックを見学したり、リハビリテーション病院の現場を見学したりすることで済まされているのが現状です。湘南慶育病院のような療養、回復期リハビリテーション病棟で1週間なり2週間なり勉強していただくと、「人間の尊厳とは何か」「人間の死とは何か」を深く考えるいい場になるのではないかと私も感じています。



先日、先生が中心となって湘南慶育病院の理念を制定されました。

職員への浸透を図るために、どのようなことを行っていますか？

病院内で理念プロジェクトを立ち上げ、6回の会議を重ねて練り上げた理念を理事長にお認めいただいて1ヶ月経ちました。理念の中で、『皆さまの「その人らしい生き方」を尊重します。』と掲げましたが、具体的にどの病棟においても患者さんと同じ目線で医療を提供するということであるということ、私から職員全員に詳しく説明しております。



この病院は藤沢市の「健康と文化の森地区」の一つの拠点となっています。この地区には「文化」は慶應義塾大学がありますが、「健康」の拠点がなかったところにこの病院ができました。ですから「健康」の拠点となっていくことが、この病院の存在価値の一つでもあります。「健康」という切り口でこのエリアの中心的存在になるような、愛される存在にならなければならないと考えています。そこで病院とはいえ、病気の方だけではなく、健康な方にも集っていただけるような場所にしていきたい、ということが理念の背景にある想いです。今年の春に初めて健育祭を行いました。今後は地域の方とのコミュニケーションを「健康」というキーワードをベースにもっともっと密にしていきたいと考えています。



2018年9月27日 湘南慶育病院 理念について報告会の様子

遠隔診療については、2018年7月に神奈川県黒岩祐治知事が来院された際に私も同席させていただきました。その後は大学との連携は進んでいますか。

はい。当院でSFC研究所と連携して進めている「遠隔在宅医療Hospital in the homeの実証」については、7月に理事長にもご同席いただいた黒岩神奈川県知事の視察に加え、11月12日には藤沢市の鈴木恒夫市長も視察されました。ここ数年、厚生労働省においても遠隔診療には大変力を入れられています。私どもとしましては、遠隔在宅医療の実用化に向けて、まずこの藤沢市でモデルケースを作っていこうと考えていますが、そのためには行政のご協力も不可欠となってきます。実用化向けのハードルはまだ高いと思いますが、ICT（情報通信技術）を活用した様々な新しい医療サービスの構築を当院としても積極的に進めていきたいと考えています。



2018年7月5日 神奈川県 黒岩 祐治 知事 来院

また慶應義塾大学SFC研究所のヘルスサイエンス・ラボと協力する共同研究が9月から始まりました。病院の一面をヘルスサイエンスラボ（湘南慶育病院連携ラボ）として提供しています。現在、当院眼科の久保田先生が主体となった白内障に関する臨床研修と、SFCの渡辺光博研究室が主体となった食事・運動・心をテーマとした基礎研究の大きく2つの研究が行われています。

病院の経営安定化に向けて、今後どのような施策をとっていかれますか。

まずは、地域の医療・介護に関連する方にこの病院の存在を知っていただき、「あそこの病院にはこういう先生がいるから頼りになる」と患者さんを送っていただけるような病院に成長していかなければならないと考えています。また、これまで以上に重症な患者さんを受け入れ、良くなって在宅復帰していただくというような医療・リハビリを施せるように努力していかなければならないと思います。

加えて医師会に所属できるように努力したいと思います。所属すると、救急搬送の輪番制度に組み込んでいただいたり、市の検診事業の斡旋を受けることができるなど、地域医療における役割も増えてきます。

その他、病院は若い先生がいると活気が出ますので、専門医を揃えて教育病院の資格を取り、若い研修医・専修医を集められるようにしていきたいと考えています。病院を活気づかせることも、経営の安定化に間接的に貢献するのではないかと考えています。また、事務系や看護・介護等においても、無駄と漏れのない保険診療ができるようにしていかなければならないと考えています。



これまでまずはフルオープン、そして患者さんを増やしてベッド稼働率を上げることが第一の目標となってきましたが、現在やっとその目標が達成されましたので、今後は医療の質を高めることに力を入れていきたいと考えています。質を高めるといことは、それぞれの患者さん・ご家族の希望をいかにして治療に反映させていくかということですが、そのことに関してはドクターだけでなく、看護・介護・セラピストなど全員一体となって質の向上を目指していけるようにしていきたいと考えています。また幸いにもこの1年間、大きなトラブルは発生しませんでした。それに甘んずることなく、しっかりとした危機管理もしていきたいと考えています。

2018年9月に230床フルオープンとなり、その後短時間でベッド稼働率を90%まで上げられ、ほぼ満床に近い状態を維持しているのは素晴らしいことだと思います。来年はセラピストを中心にたくさんの職員が入職すると聞いています。若い職員が増えていくことで、病院全体がさらに活気付いてくるのではないかと思います。病院理念も定まり、鈴木先生のリーダーシップの元に職員がベクトルを一つにしていけることができれば、比較的早い時期に経営も安定化し、予算達成も実現するのではないのでしょうか。期待しています。

